

脳動脈瘤術後 5 年を経て生じた後天性の脳動静脈奇形の一例

A case of de novo arteriovenous malformation after clipping of the aneurysm

志藤 里香¹, 小林 正人², 狩野 忠滋¹, 赤路 和則¹, 神澤 孝夫¹, 谷崎 義生¹

1 美原記念病院脳神経外科, 2 埼玉医科大学脳神経外科

【はじめに】脳動静脈奇形(AVM)の病因は完全には解明されていないが、主に胎生期の血管の形成異常により生じ先天異常と考えられている。しかし非常にまれではあるが後天性に発生した AVM も報告されている。脳動脈瘤の直達手術後、5 年間の経過観察を経て AVM を de novo に生じた一例を経験したので文献的考察も含めて報告する。【症例】73 歳女性。64 歳時、右の未破裂中大脳動脈瘤に対しクリッピングを行った。術後に合併症はなく経過は問題なかったが、69 歳時、経過観察のため施行した MRI にて右頭頂葉に新たな AVM の出現を認めた。AVM は右中大脳動脈の分枝を feeder、脳表静脈を drainer とし平均径 18mm、Spetzler Grade 2 であったが、年齢と患者の希望を考慮し、ガンマナイフで治療を行った。治療後 5 年目、残存する脳動静脈奇形 (体積 0.2ml) に対し再度照射を行った。再治療後 1 年が経過し、病変は更に縮小した。再出血や照射部位の浮腫、嚢胞形成は認めない。【考察】本患者では以前の血管造影検査上、AVM がないことが確認されており、新生 AVM と確定診断された。これまで後天性の脳動静脈奇形は 7 例報告されており、内 6 名が女性である。これらの中にはもやもや病、鎌状赤血球症、皮質形成異常などの基礎疾患(3 名)や外傷 (2 名) の修復過程により異常な血管増生が生じたと考えられるものがあつた。脳動静脈奇形の病因として潜在的な脈管細胞の脆弱性により血栓や各種ホルモン、血行力学的要素や虚血などが引き金となって生じると考えられており、本症例も開頭手術という侵襲の後、脳血流の修復・回復過程に伴って生じた可能性は否定できない。脳動脈瘤手術などの開頭手術後には生じうる病態であり、経過観察の MRA 撮影時には頭頂部まで撮影するなどの留意も時に必要であると考えられた。